

## 大学教育における「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」 をもとにしたスポーツコーチング科目の授業実践

山元 康平<sup>\*1</sup>

### Practical Report in sport coaching class based on the "Model Core Curriculum for Coach Development" in university education

Kohei YAMAMOTO<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> Faculty of Sports and Health Sciences, Department of Sports and Health Sciences

This report summarizes one of the contents of the sport coaching class based on the "Model Core Curriculum for Coach Development" in university education. Sixteen lessons of "Sport Coaching Theory" were conducted based on the "Model Core Curriculum for Coach Development". Based on the "Model Core Curriculum for Coach Development," classes can be more motivating to students than lecture-style classes through active learning class. In addition, the content related to training needs to be taught not only in "Sports Coaching Theory" but also in cooperation with other classes. Furthermore, students tended to learn more about the role and ethics of coaches through the coursework.

**Key Words :** Model Core Curriculum for Coach Development, sport coaching,

#### 1. はじめに

「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」が、2016年に作成された。本カリキュラムは、当時の文部科学大臣によって「日本のスポーツ史上最大の危機」<sup>(1)</sup>と表現された2012年にスポーツ指導現場で起こった2つの重大な事件（高校バスケットボール部員が指導者の暴力・ハラスメントを苦に自死に至った事件および柔道女子日本代表チームが監督の暴力・ハラスメントについて日本オリンピック委員会に提訴した事件）を受け、2013年「スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）」、2014-15年文部科学省委託事業『コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業」<sup>(2)(3)</sup>により作成されたものである。その特徴として、従来のコーチ養成プログラムと比較して、コーチの「理念・哲学」「対自己力・対他者力」等の「人間力」を重視していることや、現場実習やアクティブラーニングの導入等が挙げられる。

本カリキュラムは、「全国の体育大学や体育学部を有する大学・短期大学はもとより、教員養成系大学、スポーツ系専門学校に学ぶ学生が卒業後の進路においてスポーツ指導の場（コーチングの場）に立った際、新しい時代にふさわしいコーチングを実践できるよう、すべての学校に導入されることを目指す」とされている<sup>(3)</sup>。特に大学におけるスポーツ指導者教育への導入が強く主張されており、大学の授業への導入を念頭に、45時間15コマ授業案も提案されている<sup>(3)</sup>。本カリキュラムは作成から10年近くの歳月を経過しているが、スポーツ指導者を目指す大学生を対象に、本カリキュラムをもとに行った際の教育効果について検証することは重要な課題であると考えられる。

一方で、2018年には、大学アメリカンフットボールの試合中の危険な行為が社会問題となる事件が発生した。さらに、2020年には国際人権監視NGO「Human Right Watch」（HRW）によって、日本のスポーツにおける子ども

\* 原稿受付 2024年5月7日

<sup>\*1</sup> スポーツ健康科学部 スポーツ健康科学科  
E-mail: kyama@fukui-ut.ac.jp

も達への虐待の実態を告発する「数えきれないほど叩かれて」<sup>(4)</sup>と題した報告書が発表され、我が国のスポーツ指導全体が、国際社会から厳しい批判を受けるに至った。本報告書の中では、「モデル・コア・カリキュラム」がスポーツコーチング教育に十分に利用できていないことも指摘されている<sup>(4)</sup>。これらのことから、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」に基づく大学におけるスポーツコーチング教育の現状と可能性について検討することは、我が国のスポーツ指導における極めて重要かつ喫緊の研究課題であるといえる。

これらを踏まえて、筆者は本学スポーツ健康科学科の専門科目「スポーツコーチング論」（3年生対象、教職必修科目）において、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」を元にした授業を実践した。本稿では、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」を元にした大学におけるスポーツコーチング系科目の授業の取り組みと今後の課題について報告する。

## 2. 授業の目的と概要

本授業の目的は、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」および図子のコーチングモデル<sup>(5)</sup>をもとに、以下のように設定している：「本授業では、スポーツのコーチングに関する理論および実践事例について学習する。具体的には、コーチが行う3つの主要な行動である①指導行動、②育成行動、③マネジメント行動に関する理論と実践事例を学ぶとともに、コーチが持つべきコーチング哲学・倫理についても理解を深める。これらを通して、コーチが持つべき基本的な行動理論と哲学・倫理感を習得することを目的とする。」<sup>(6)</sup>。また、具体的な授業の到達目標として、以下の6つを設定している：「1 コーチの起源や歴史的背景について理解する。2 競技力を向上させるための指導行動の基礎的理論について理解する。3 人間力を向上させる育成行動の基礎的理論について理解する。4 チームや組織を運営・管理するためのマネジメント行動について理解する。5 コーチング哲学・倫理について理解する。6 上記を通して、コーチが持つべき基本的な行動理論と哲学・倫理感を習得する。」。授業では、「モデル・コア・カリキュラム」の特徴である、アクティブラーニング形式を積極的に取り入れ、スポーツ指導者が実際に直面するトレーニングやチームマネジメントに関する具体的課題に対する考察や、それらをもとにした受講生間のディスカッションやプレゼンテーションを多くの授業で実践している。

## 3. 授業の具体的展開

Table 1 Class flow based on the "Model Core Curriculum for Coach Development"

回	内容	目的
1	ガイダンス、スポーツの意義と価値	【人間力】 コーチの倫理 思考法 コミュニケーション キャリアデザイン
2	プレイヤーとともに学び続けるコーチ	
3	コーチの倫理観・規範意識	
4	多様な思考法	
5	コーチのセルフ・コントロール、コーチのキャリアデザイン	
6	コミュニケーション	
7	人的環境の構築、プレイヤーのキャリアデザイン	
8	スポーツトレーニングの基本的な考え方と理論体系	【知識技能】 トレーニング論 健康・栄養・応急処置 マネジメント
9	体カトレーニング・技術トレーニング	
10	メンタルトレーニング・スポーツの心理	
11	スポーツと健康：アンチドーピング、外傷と障害の予防・救急処置	
12	スポーツと栄養	
13	ライフステージに応じたコーチング、コーチング現場の特徴	
14	リスクマネジメント、クラブチームの運営と事業	
15	試験	総括 試験
16	試験のフィードバック・授業全体の総括	

### 3.1 授業計画

Table 1は、16回の授業の計画を示したものである。これらは「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」において、大学の授業への導入を念頭に、45時間15コマの授業案をもとに作成したものである。

授業は大きく第1-7回「人間力」に関する部分と、第8-14回「知識技能」に関する部分に分かれており、第15-16回で試験および総括を行う構成となっている。第1-7回「人間力」に関する部分では、「スポーツの意義と価値」「プレイヤーとともに学び続けるコーチ」「コーチの倫理観・規範意識」「多様な思考法」「コーチのセルフ・コントロール、コーチのキャリアデザイン」「コミュニケーション」「人的環境の構築、プレイヤーのキャリアデザイン」等をテーマに、スポーツ指導者が持つべき倫理観や暴力根絶の重要性、プレイヤーとのコミュニケーションや思考法、セルフ・コントロール、キャリアデザインなど、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」の特徴である、スポーツの競技力向上のためのトレーニング指導だけではない、コーチが備えるべき人間力に関する内容を学ぶ。第8-14回「知識技能」に関する部分では、従来のカリキュラムと同様に、スポーツの競技力向上のための知識や技能について、「スポーツトレーニングの基本的な考え方と理論体系」「体力トレーニング・技術トレーニング」「メンタルトレーニング・スポーツの心理」「スポーツと健康：アンチドーピング、外傷と障害の予防・救急処置」「スポーツと栄養」「ライフステージに応じたコーチング、コーチング現場の特徴」「リスクマネジメント、クラブチームの運営と事業」等について学ぶ。

### 3.2 各回の授業内容と授業実践者の省察

上述したように、「モデル・コア・カリキュラム」の特徴である、アクティブラーニング形式を積極的に取り入れた。例えば第4回「多様な思考法」の授業では、「創造的思考」として、チームの遠征時の経費負担を減らすためにはどのような工夫が考えらるか、といった学習者が実際のスポーツ活動で経験する課題について、「批判的思考」では、レギュラー選抜に関する思考実験として、チームの活動への取り組みが積極的でないプレイヤーをレギュラーに選抜するかについて、スポーツ指導者の立場で考察し、ディスカッションやプレゼンテーションを行った。また、第6回「コミュニケーション」の授業では、グループワーク、役割分担を行い、スポーツやコーチングに関する様々なテーマでディスカッションとプレゼンテーションを行った。さらに、ICTの活用として、授業支援システム(manaba)で回答を集計し、集計結果や個別の回答事例を提示しながら授業を展開することで、多くの受講生の意見を集約し、受講生同士の考えを共有しながら授業を展開するようにした。こうした取り組みにより、受講生同士の交流がうまれたり、互いの意見に興味をもつことで、講義形式の授業よりも、積極的に授業に参加できている受講生も少なくない印象であった。

一方で第8-14回「知識技能」領域で扱う部分では、第8回「スポーツトレーニングの基本的な考え方と理論体系」ではトレーニングの原理原則、トレーニングサイクルモデル、パフォーマンス構造、第9回「体力トレーニング・技術トレーニング」では筋力トレーニング、持久力トレーニング、技術構造、学習位相、トレーニング手段・方法論、年間トレーニング計画の作成等を扱うが、これらの回は扱うべき授業内容に対して時間数が足りず、講義と演習を適切なバランスで両立することが非常に困難な印象であった。上述したように、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」は、スポーツ指導における暴力根絶や、スポーツ指導者およびプレイヤーの人間力の向上を目指し、人間力や倫理を扱う時間が従来のカリキュラムから大幅に増加しており、その反面、競技力の向上のためのスポーツ指導やトレーニング論を扱う時間が縮小されており、「スポーツコーチング論」の授業のみでトレーニング論や競技力向上のための指導に関する内容を網羅することは困難な印象であった。この課題を解決するためには、関連する他の専門科目、例えば「体力トレーニング」「生理学」「運動学」「バイオメカニクス講義」等の科目と連携し、「スポーツコーチング論」だけでなく、学科のカリキュラム全体で教育していく必要があると考えられる。

### 3.3 学習成果の評価

スポーツコーチングに関連する能力を定量的に評価する評価法は十分に確立されていないため、本授業を通じたスポーツコーチングに関する学習成果を定量的に示すことは困難であるが、授業内に実施した課題やアンケートの結果から、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」をもとにした本授業の成果について検討を試

みる。まず、授業の主要な領域である「人間力」「知識技能」のそれぞれの領域について、選択形式の知識系問題と、課題に対する論述形式の課題を実施したところ、選択形式の知識問題では、受講生全体の正答率が人間力：73±16%，知識技能：77±12%であり、両者に顕著な差はなく、70-80%近い正答率であった。一方で、論述形式の問題の正答率では、人間力：78±18%に対し、知識技能：64±22%であり、知識技能の正答率がやや低い傾向にあった。人間力に関する課題では、「スポーツ指導において暴力を根絶するための取り組み」、知識技能に関する課題では、「スポーツパフォーマンス向上のためのパフォーマンス構造論、トレーニング手段論、コーチングの留意点」をそれぞれテーマとしたが、そもそもの課題の難易度に差があった可能性も考えられるため、課題の妥当性について今後検証が必要である。一方で、上述したように知識技能に関する領域、特にトレーニング論に関する領域については、授業時間の確保が十分でなかった可能性があり、このことが知識技能領域の正答率の低さ、すなわち、学習者の理解度の低さに関係している可能性がある。そのため、上述したように、トレーニング論を始めとした知識技能領域については、授業内での時間配分や取り扱う内容について再考するとともに、他の科目との連携により学科のカリキュラム全体で教育していく必要があると考えられる。

また、授業終了時に実施したアンケートでは、各回の内容について「十分～足りない」を4件法で回答させたが、全ての回が95%以上「十分」の回答であった。具体的に、「授業を通して特に学べたと思うことは何か」と質問したところ、「コーチ（スポーツ指導者）の役割」が43.1%で最も高く、次いで「トレーニング（技術、体力、計画）」が26.2%、「暴力・ハラスメントの問題」が10.8%であった。また、「より深く学びたい内容」について質問したところ、「トレーニング論」が15.4%で最も高く、次いで「心理・メンタルトレーニング」13.8%、「種目別のコーチング論」9.2%、「栄養」9.2%であり、その他、マネジメント、言葉かけ、子ども・女性のコーチング等がみられた。これらのアンケート結果から、受講生は本授業を通して、コーチ（スポーツ指導者の役割）として、競技力向上のための指導だけでなく様々な役割があることや、暴力・ハラスメントを根絶するための倫理観について学んだと感じていると考えられる。また、トレーニング論や種目別のコーチング論については、受講生の関心が高いため、上述したように、他の科目とも連携し、基礎的内容からより実践的な実習（PBL科目や卒業研究等）まで、4年間を通して取り組めるようカリキュラムを設計することが今後の課題であると考えられる。

#### 4. 今後の課題と結語

本稿では、本学スポーツ健康科学科の専門科目「スポーツコーチング論」において、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」を元にした授業実践について、授業の取り組みと今後の課題について報告した。本稿で報告した本学での取り組みから、「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」をもとにした大学におけるスポーツコーチング科目の授業では、アクティブラーニング形式の授業実践により、講義形式の授業よりも学習者が意欲的に授業に取り組める場合があることや、知識技能領域のトレーニングに関する内容は、スポーツコーチング論だけでなく他の科目と連携して教育する必要があること、さらには、学習者は授業を通して、コーチ（スポーツ指導者）の役割や倫理について学んでいる傾向があることが示された。今後は、授業内容や授業効果の検証方法を改善し再度検証することや、効果的な授業実践のための教材を開発することが課題である。

#### 注と参考文献

- (1) 日本スポーツ協会，“スポーツ指導における暴力根絶へ向けて ～文部科学大臣メッセージ”，[https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/koho\\_kyanpen/news/20130207daizinmessage.pdf](https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/koho_kyanpen/news/20130207daizinmessage.pdf) (参照日 2024年4月1日)。
- (2) 日本体育協会 “平成26年度コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業報告書” (2015)
- (3) 日本体育協会 “平成27年度コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」の作成事業報告書” (2016)
- (4) Human Right Watch, “数えきれないほど叩かれて 日本のスポーツにおける子どもの虐待”，<https://www.hrw.org/ja/report/2020/07/20/375777> (参照日 2024年4月1日)。
- (5) 図子浩二, “コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容”, コーチング学研究, Vol. 27, No. 2(2014), pp. 149-161.

大学教育における「コーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラム」をもとにしたスポーツコーチング科目の授業実践

(6) 福井工業大学, “WEB シラバス”, <https://www.fukui-ut.ac.jp/introduction/public/syllabus/> (参照日 2024 年 4 月 1 日).

(2024年8月2日受理)